

# トランジションを見据えた高校・大学教育改革

溝上 慎一

(京都大学高等教育研究開発推進センター／教育学研究科)

<http://smizok.net/>

E-mail [mizokami.shinichi.4u@kyoto-u.ac.jp](mailto:mizokami.shinichi.4u@kyoto-u.ac.jp)

## なぜ10年トランジション調査か？

- ・トランジションの捉えなおし(社会とのチューニング)
- ・教育資格＋ソフトスキル(技能・態度[能力])  
主体性の3軸(対課題・対他者・対時間)

# Contents

- ①トランジションと変わる社会
- ②変わる大学での学び
- ③10年トランジション調査の考察と今後の展開

# Contents

- ①トランジションと変わる社会
- ②変わる大学での学び
- ③10年トランジション調査の考察と今後の展開

## トランジションの歴史的背景

・歴史的に見れば今日の多くの先進国では、19世紀末から20世紀初頭にかけて、社会が工業化・近代化され、国民国家の形成のもとに学校教育もまた近代化されていった。

・以降、学校教育を経て仕事(社会)へ移行するという人びとのライフコース、とくに義務教育終了後の(後期)中等教育・高等教育を受けて就職していくという「学校から仕事へのトランジション (school-to-work transition)」の経験は、はじめは支配階級や中産階級の子弟より、徐々にその他さまざまな立場の人びとへと拡がり一般化してきた(溝上, 2010; Neumark, 2007)。

### Reference:

溝上慎一・松下佳代(編)(2014). 高校・大学から仕事へのトランジションー変容する能力・アイデンティティ

# 高校／大学短大の進学率

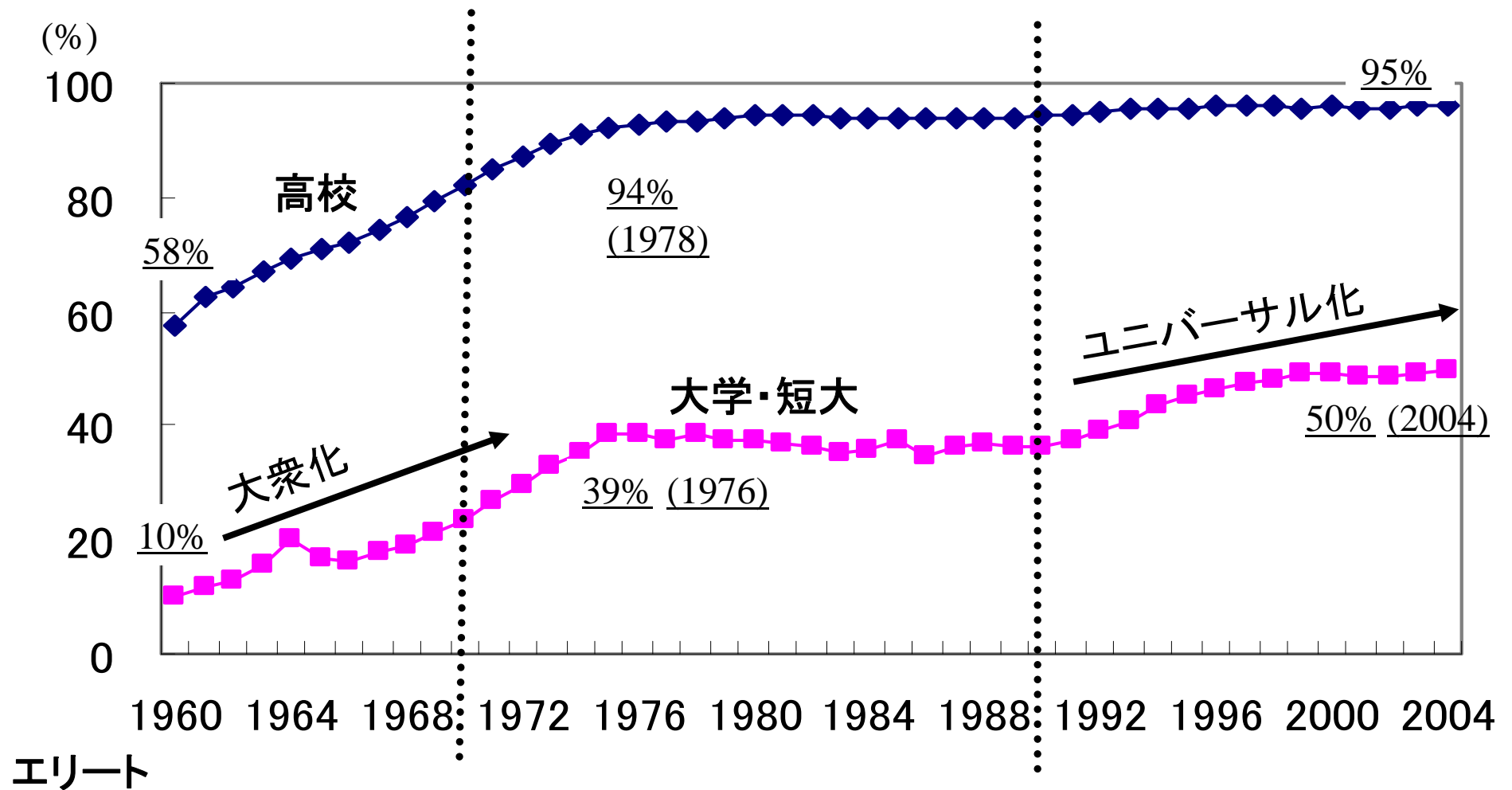
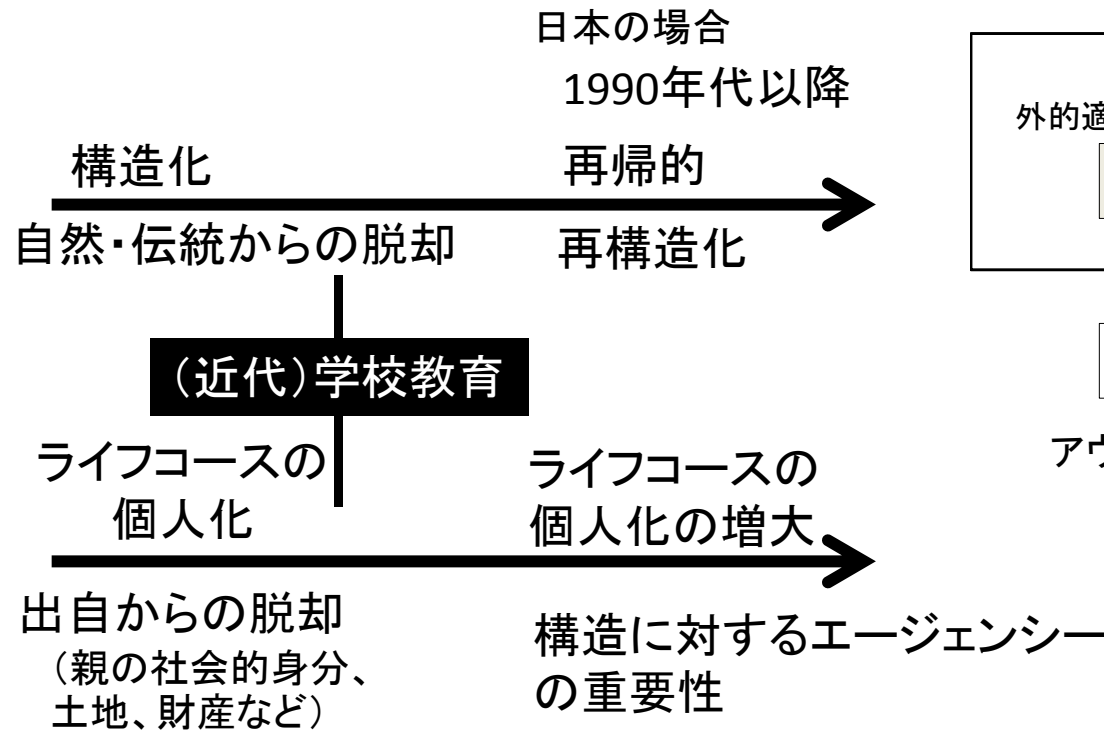


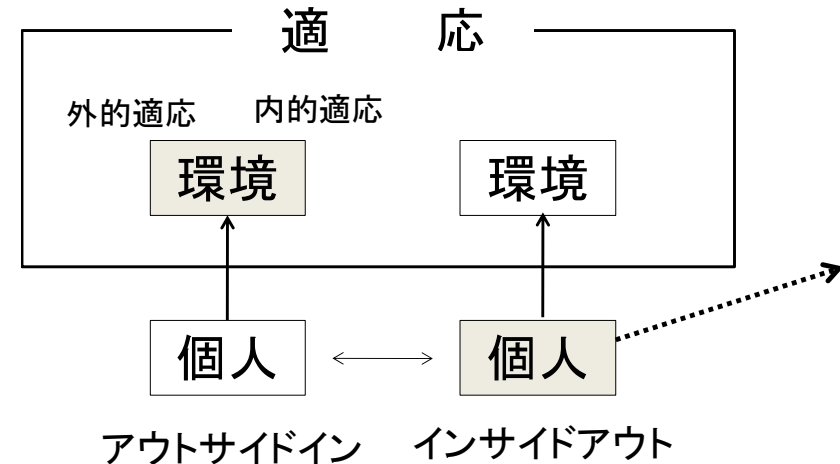
図 18歳人口と高校／大学・短大進学率 『文部科学白書』

# 変わる社会・進むライフコースの個人化

## 説明①:近代論的アプローチ



## 説明②:適応論的アプローチ



### Reference:

- 溝上慎一 (2004). 現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる— NHKブックス
- 溝上慎一 (2010). 現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ— 有斐閣選書
- 溝上慎一・松下佳代 (編) (2014). 高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育— ナカニシヤ出版

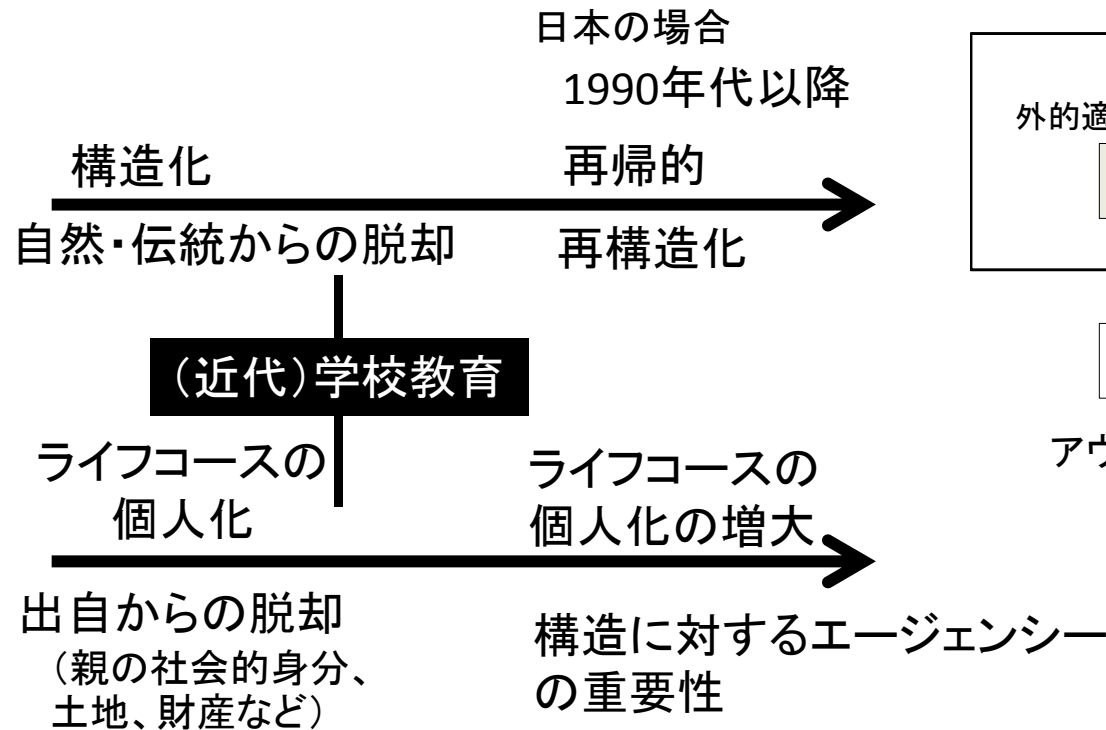
## 学校卒業後の多様なキャリアパス

	男性	女性
正社員定着	31.6	26.4
正社員→正社員	10.8	8.2
正社員→失業・無業	6.4	0.6
正社員→非典型→正社員	3.3	5.9
正社員→非典型	0.2	16.2
正社員→自営・家業	10.6	1.1
正社員→非典型→失業・無業	12.3	0.8
非典型→正社員	1.0	8.9

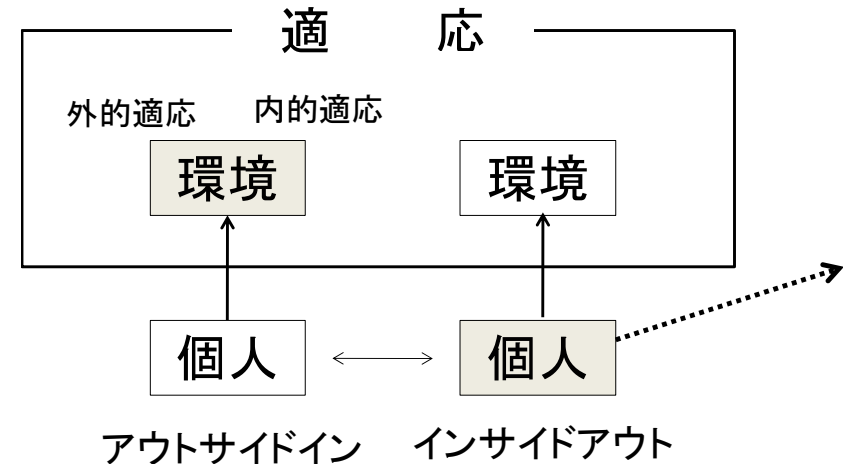
(小杉,2010より作成)

# 変わる社会・進むライフコースの個人化

## 説明①: 近代論的アプローチ



## 説明②: 適応論的アプローチ



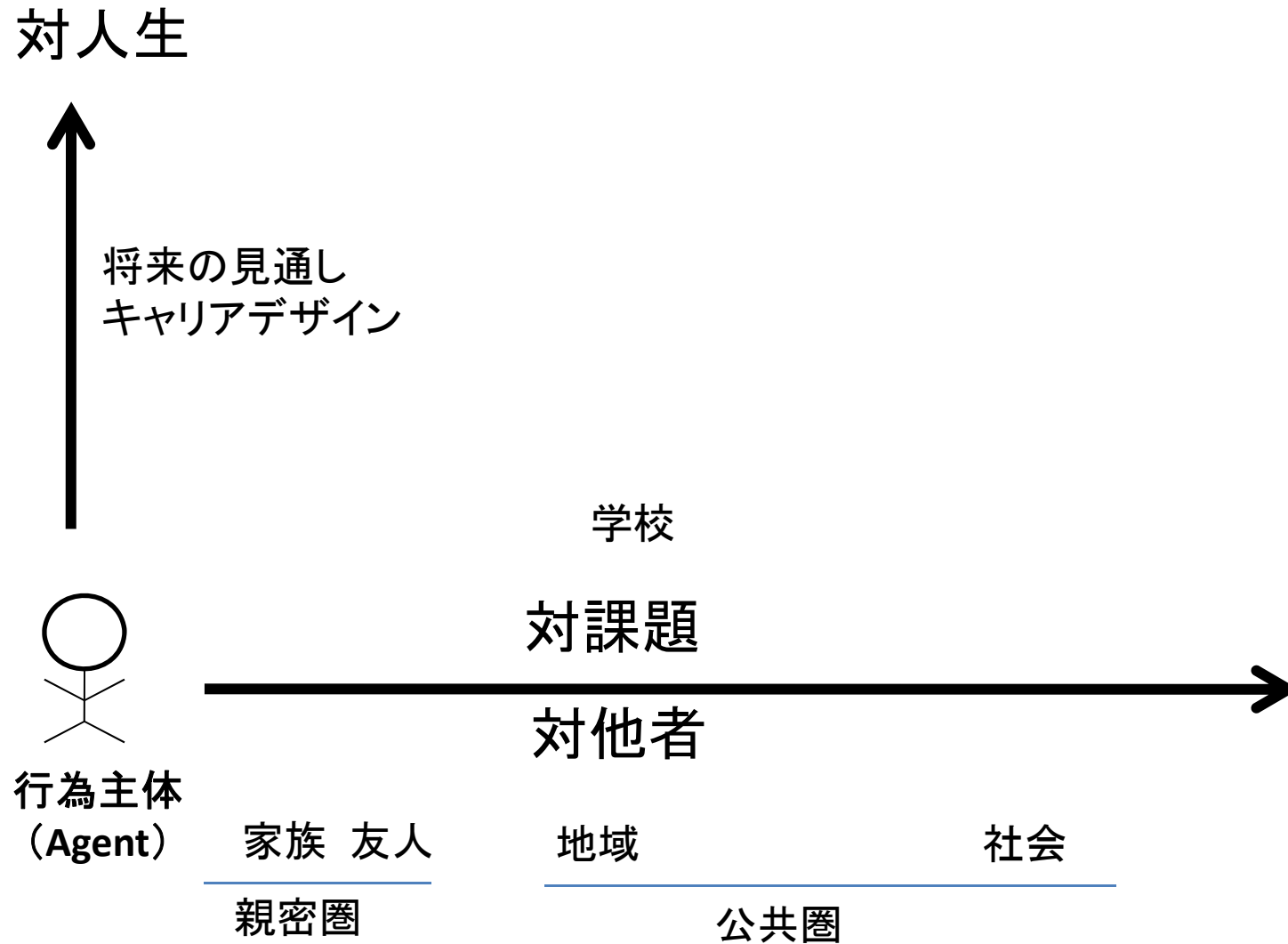
我々は「主体性」を「主体的な学び」だけで理解していないか。新しい次元を見逃していないか

### Reference:

- 溝上慎一 (2004). 現代大学生論ーユニバーシティ・ブルーの風に揺れるー NHKブックス
- 溝上慎一 (2010). 現代青年期の心理学ー適応から自己形成の時代へー 有斐閣選書
- 溝上慎一・松下佳代 (編) (2014). 高校・大学から仕事へのトランジションー変容する能力・アイデンティティと教育ー ナカニシヤ出版



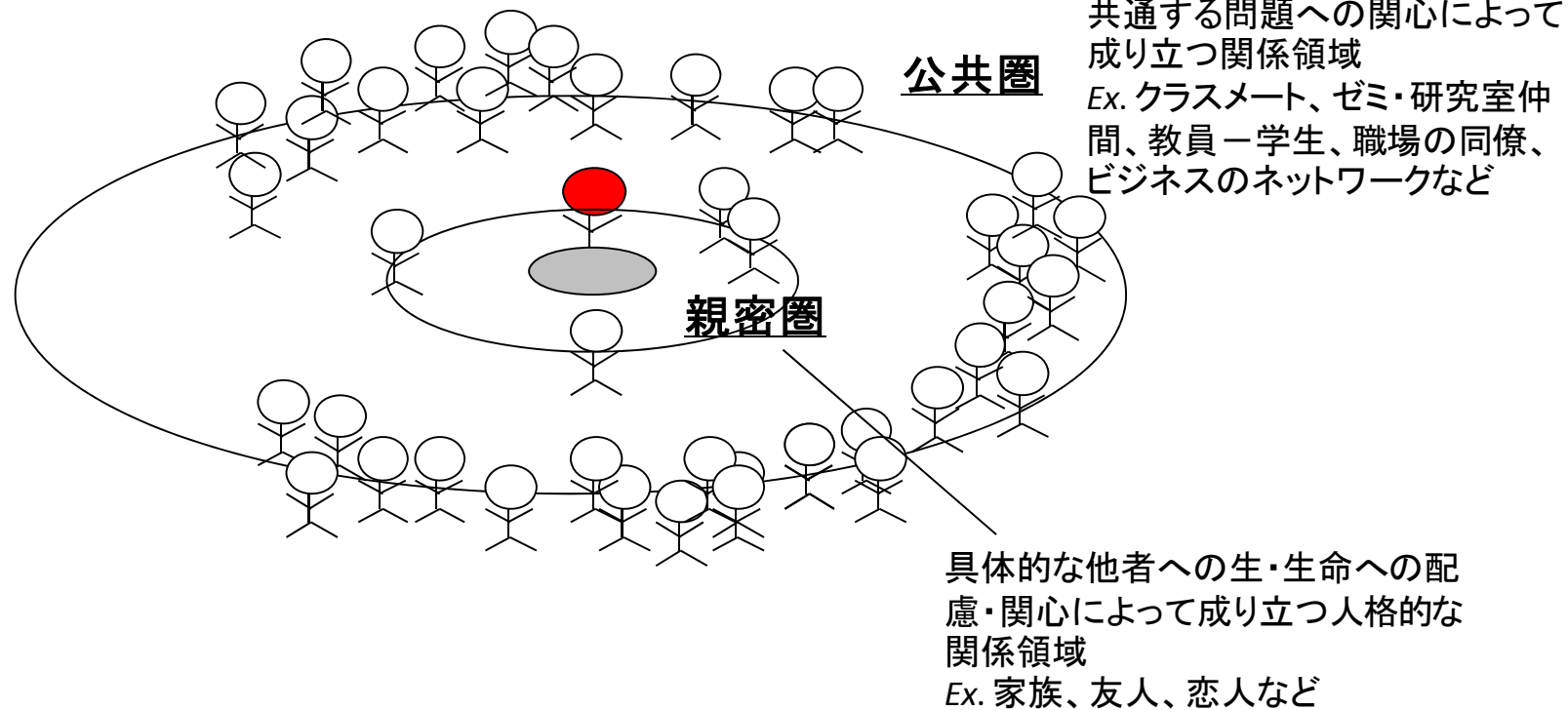
# ◆エージェント(行為主体性)の対象



# 二種類の他者・対人関係：親密圏と公共圏

10

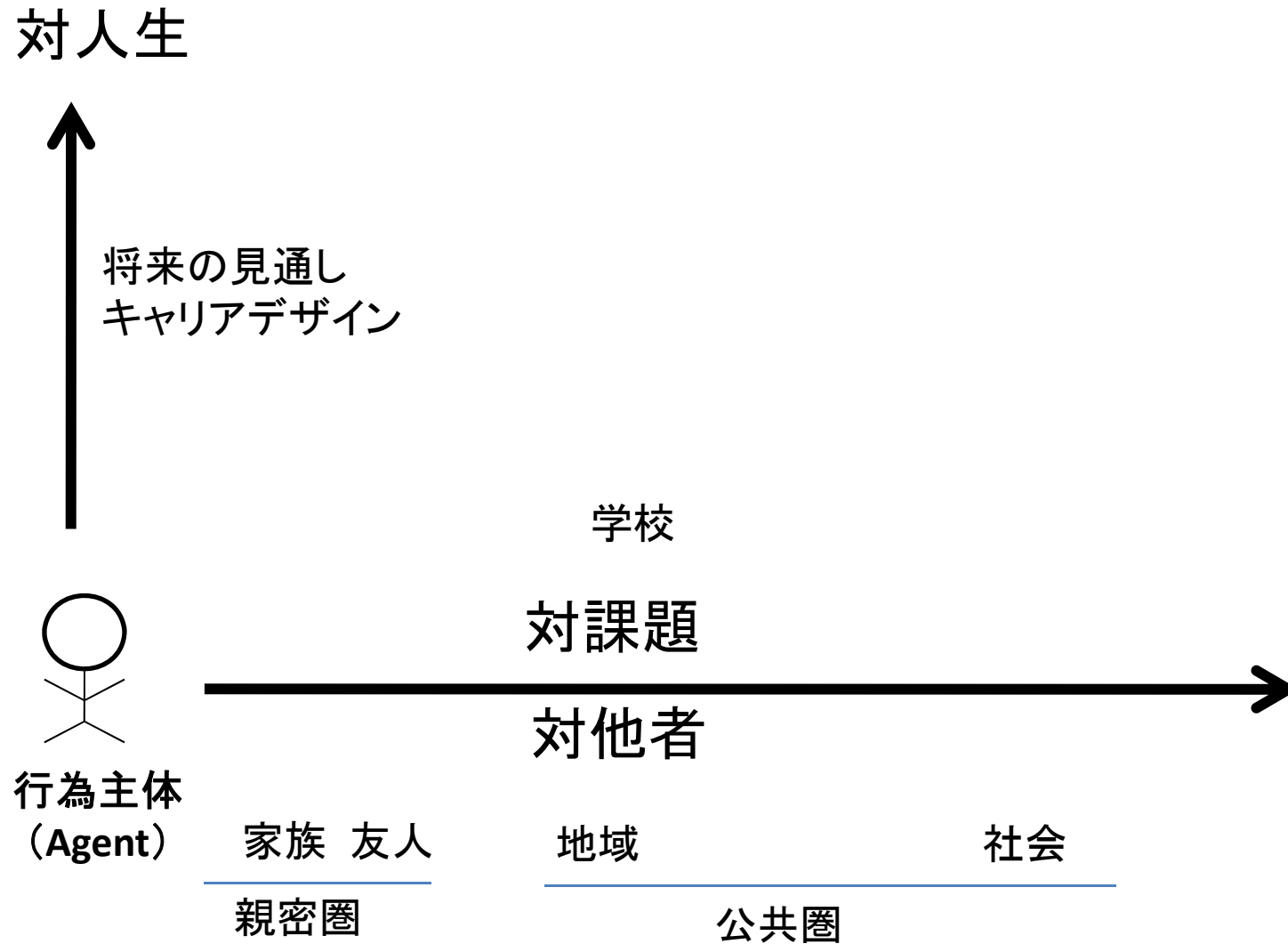
3



- ・公共圏コミュニケーションは、友だちとの雑談・おしゃべり、情報・知識の収集・分析、思考などを伴わないクラブ・サークル、アルバイトではなかなか身に付かない
- ・課題ベースの学習、他者との協同学習（アクティブラーニング型授業）に参加することなどで磨く

参考文献 溝上慎一 (2014). 自己－他者の構図から見た越境の説明－アクティブラーニングの潮流に位置づけて－ 富田英司・田島充士 (編) 大学教育－越境の説明をはぐくむ心理学－ ナカニシヤ出版 pp.221-230.

# ◆エージェント(行為主体性)の対象



# Contents

- ①トランジションと変わる社会
- ②変わる大学での学び
- ③10年トランジション調査の考察と今後の展開

# アクティブラーニングとは

## 定義:

- ・一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。
- ・知識習得を目指す伝統的な教授学習パラダイムの転換を目指す文脈で用いられ、その授業においては「アクティブラーニング型授業」等として使用されるべきである。

### ◆認知プロセスとは

「知覚・記憶・言語、思考といった心的表象としての情報処理プロセス」

(論理的 / 批判的 / 創造的思考、推論、判断、意思決定、問題解決など)

(溝上慎一 2014.8末刊行予定『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂)

# アメリカの一般的な授業形式(講義+演習)



講義+講義



演習

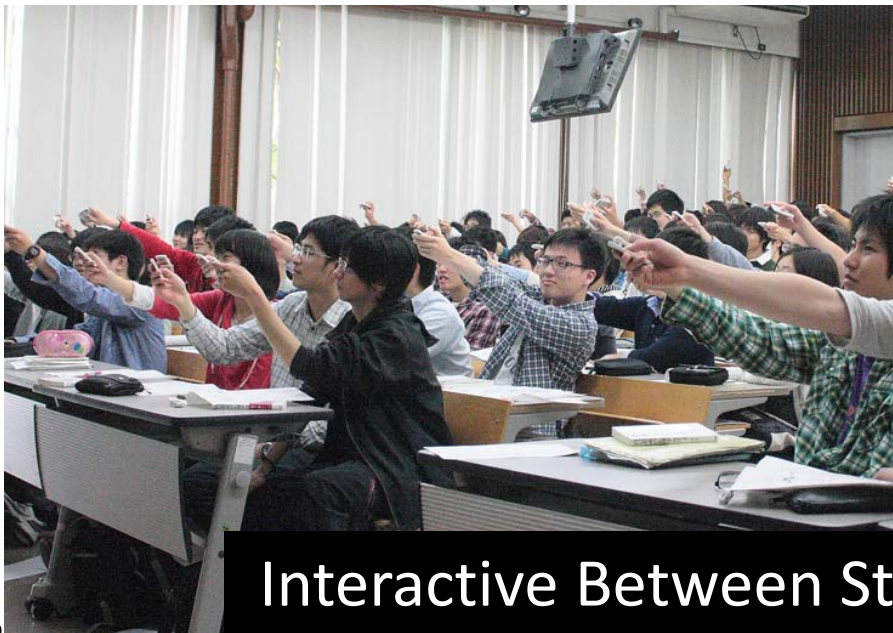
Seminar Tutorial

一般的には、週3回(1h×3)、3単位

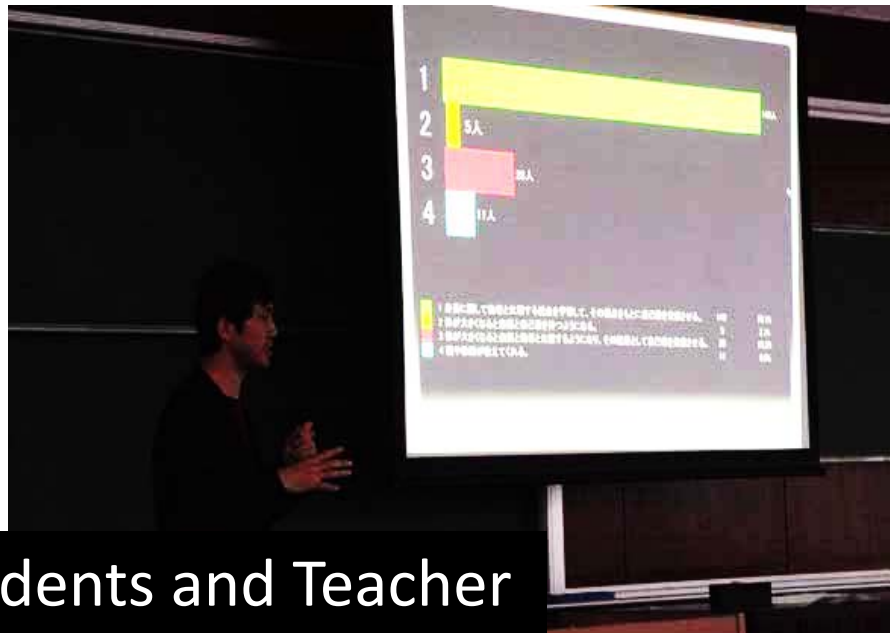
# 大学での教育と学生の学びーアクティブラーニングー



Interactive Between Students



Interactive Between Students and Teacher



# 他者 (Between Students) の拡張





## 空間(教室内・教室外)の拡張



### 反転授業

(the flipped classroom / the inverted classroom)

従来教室の中(授業学習)でおこなわれていたことを外(授業外学習)にして、入れ替える教授学習の様式のこと。授業では、その授業外学習で学んだことをもとに、知識の確認や定着、活用、さらには協同学習など、アクティブラーニングをおこなう。

(Lage, Platt & Treglia, 2000)

# 世界は学習パラダイム。日本は深刻なレベルで遅れている



MIT(マサチューセッツ工科大学)の物理学の授業



クエスト大学カナダでの生物学の授業



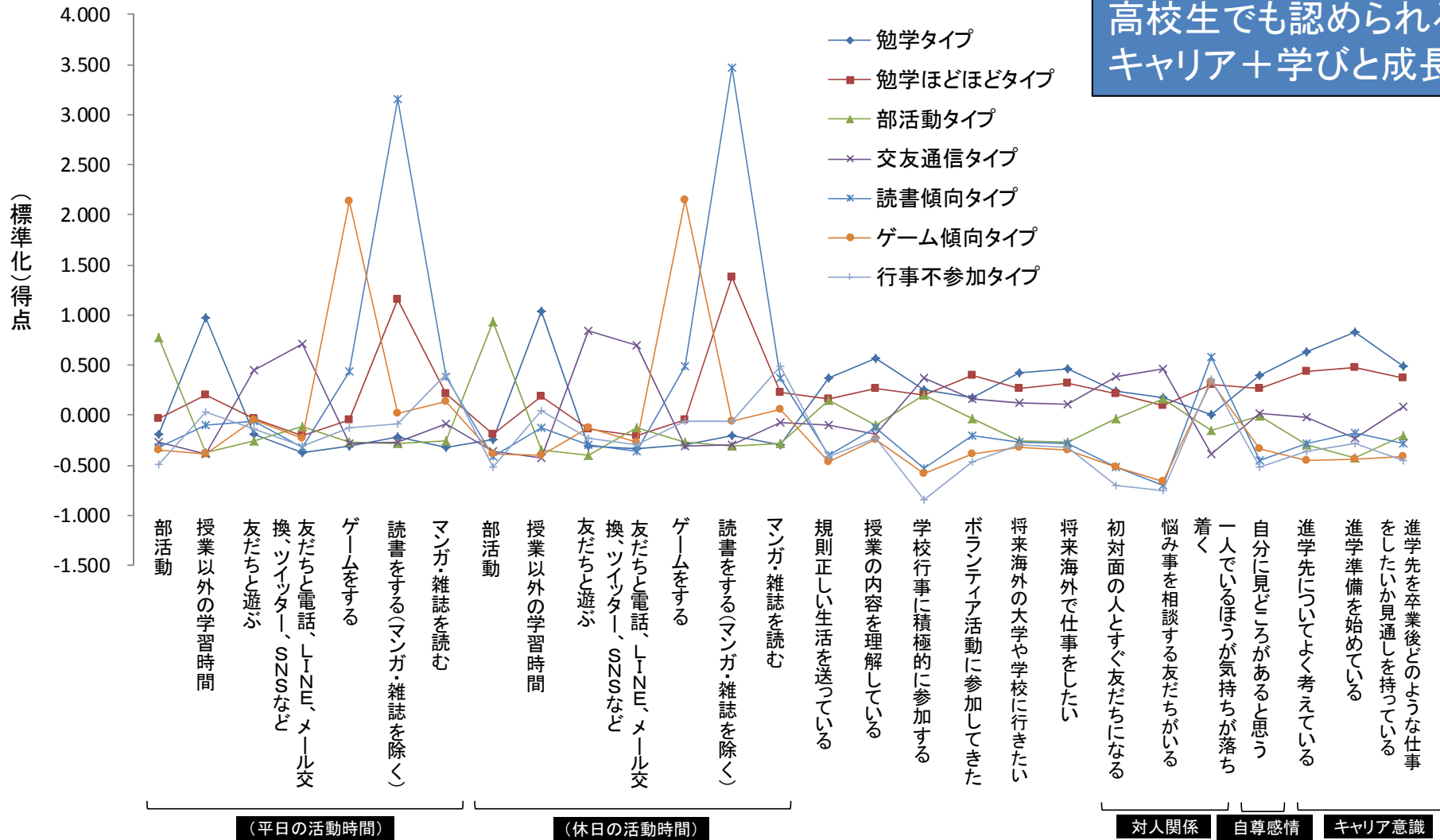
講義とアクティブラーニングは常にセット

# Contents

- ①トランジションと変わる社会
- ②変わる大学での学び
- ③10年トランジション調査の考察と今後の展開

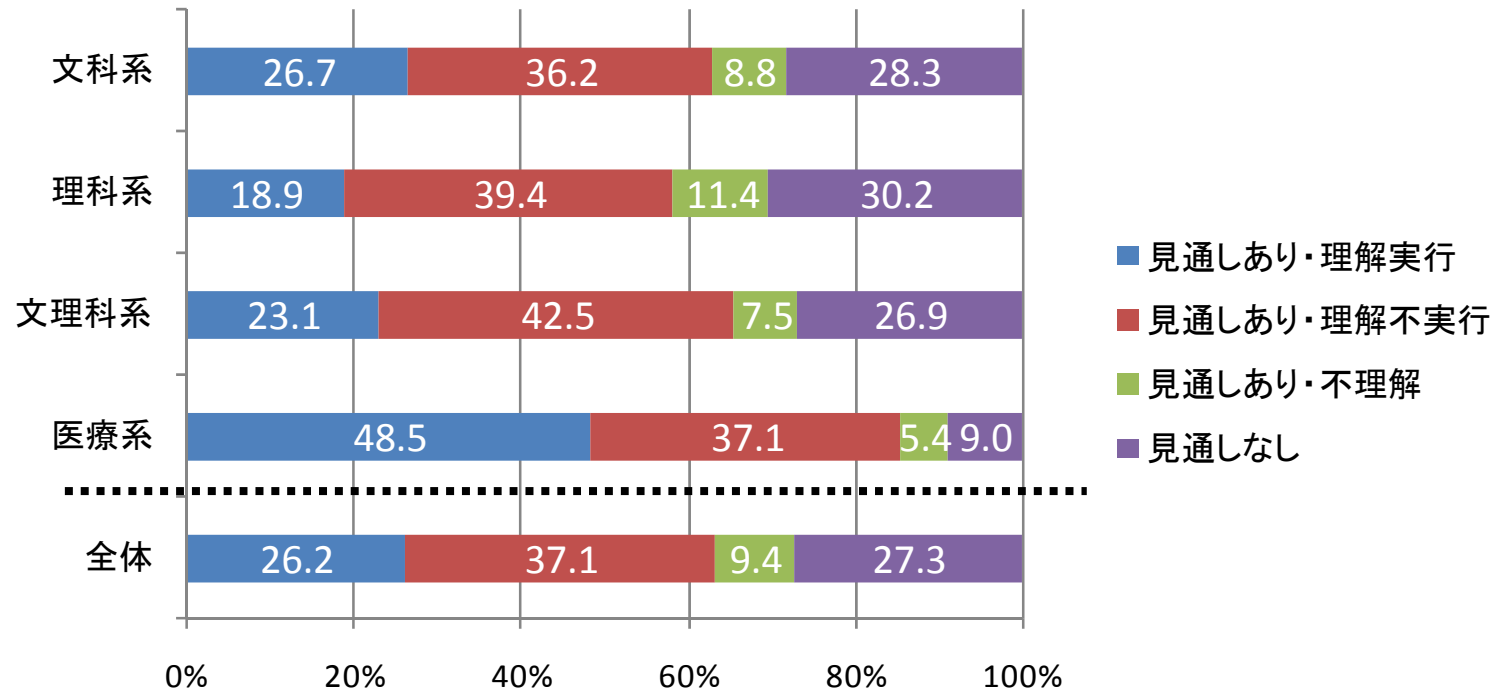
# 図 高校生の7タイプ

大学生と同じ知見が  
高校生でも認められる  
キャリア+学びと成長



クラスタ分析(K-means法)

## 二つのライフ(将来の見通しと理解実行)

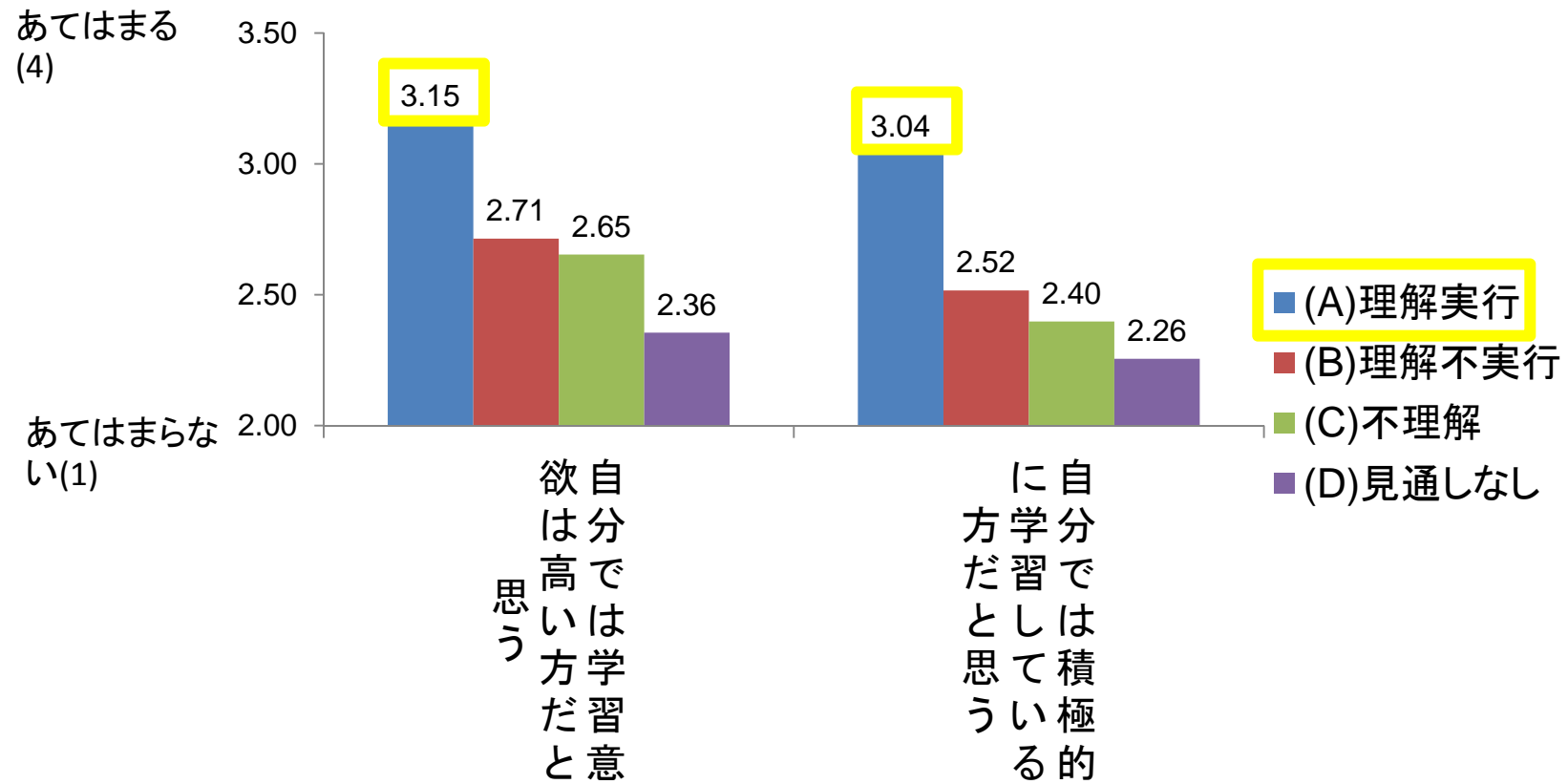


大半の学生は将来と日常が接続していない

## Data Source:

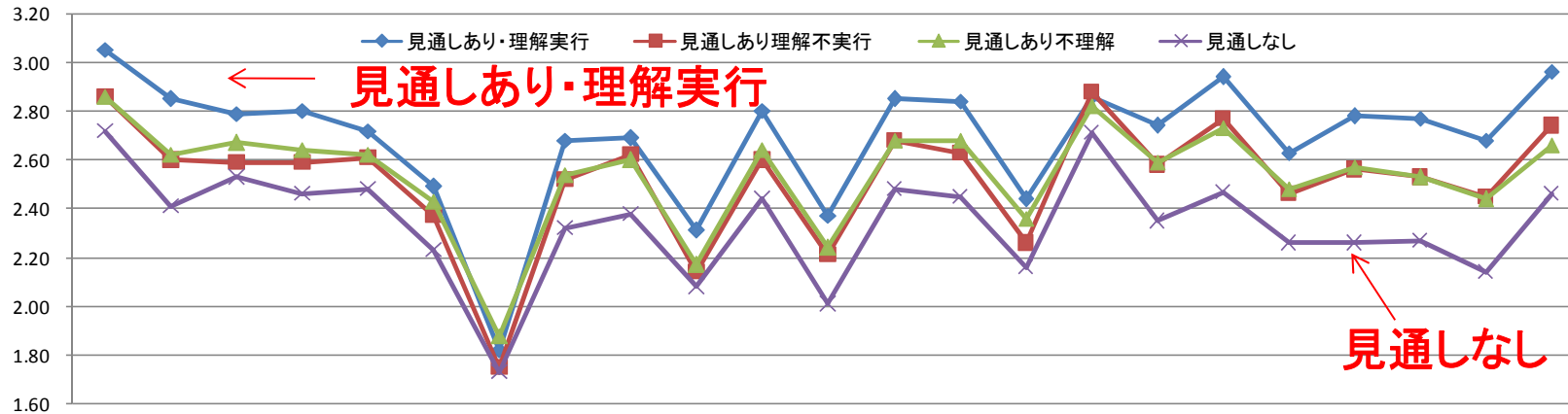
京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会共催『大学生のキャリア意識調査2007』より。全国の国公立大学生2,013名(1年生988人、3年生1,025人)。  
詳しくは<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/> を参照

# 二つのライフは学習動機に影響を及ぼす



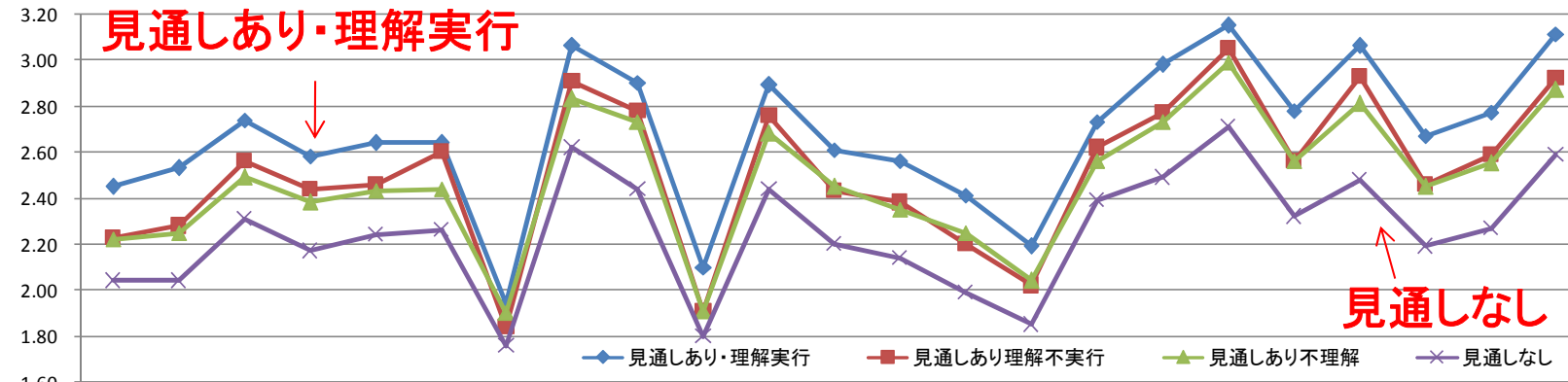
# 1 二つのライフ×知識・能力の獲得

(4) かなり身についた



a. 授業で身につけた知識・能力

(4) かなり身についた



(1) まったく身につかなかった

- 忍耐力強く継続して物事に取り組む力
- 競争心
- 知的面での自信
- チャレンジ精神
- 創造性
- 他人との協調性
- 時間を有効に利用する能力
- コンピュータ・インターネットの操作能力
- 数理的な能力
- プレゼンテーション能力
- 文章表現能力
- リーダーシップ能力
- 問題解決能力
- 外国語での口頭と筆記によるomnilingualコミュニケーション能力
- 日本語での口頭と筆記によるomnilingualコミュニケーション能力
- 対話の能力
- 起業家精神
- 市民性と倫理的責任感
- 情報の管理能力と技術
- 分析を通しての批判的思考力
- 専門外にわたる幅広い教養
- 将来の職業に専門的知識を生かす応用力
- 専門分野で研究するための基礎的な学力と技術

b. 授業外で身につけた知識・能力

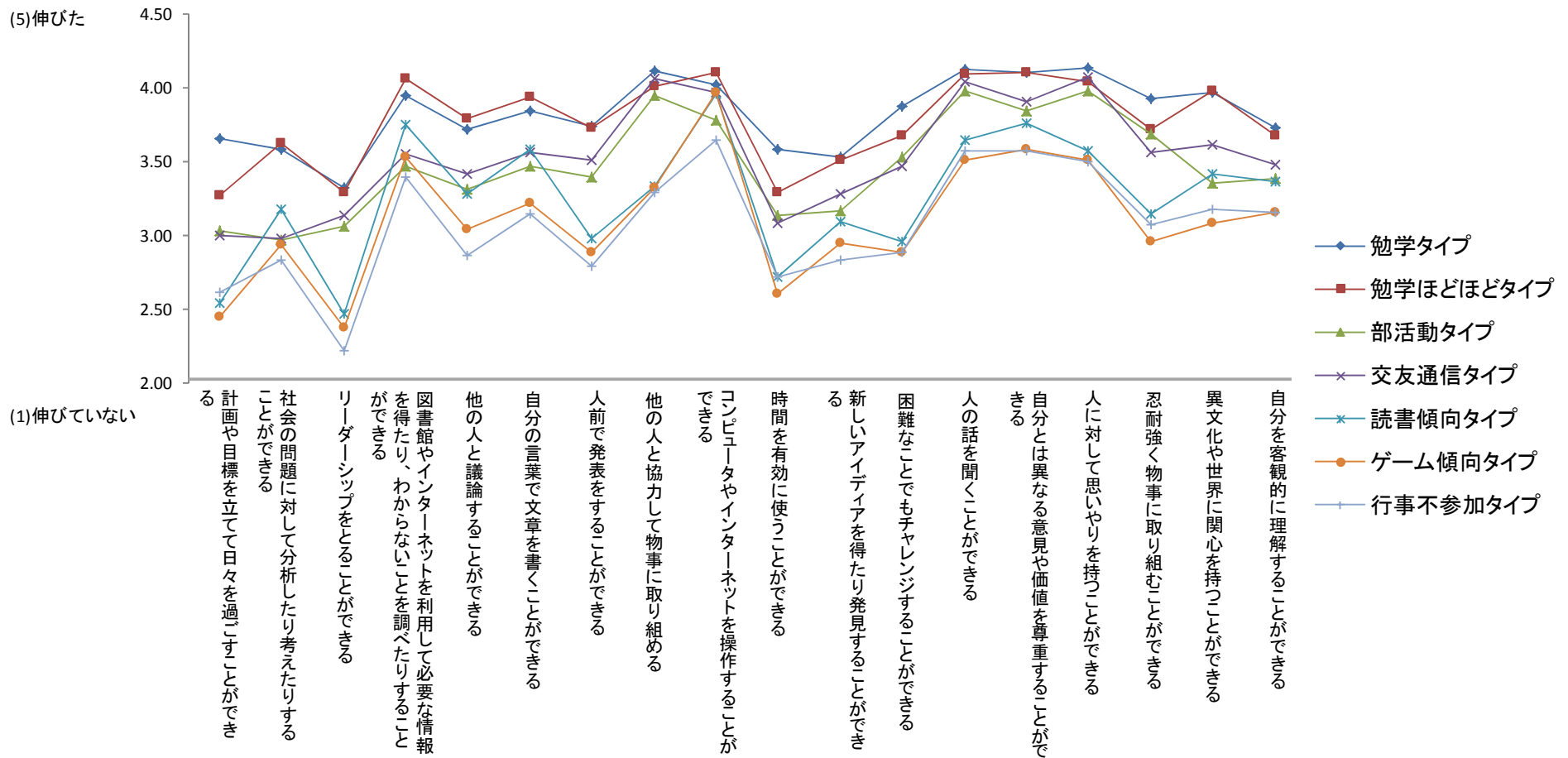
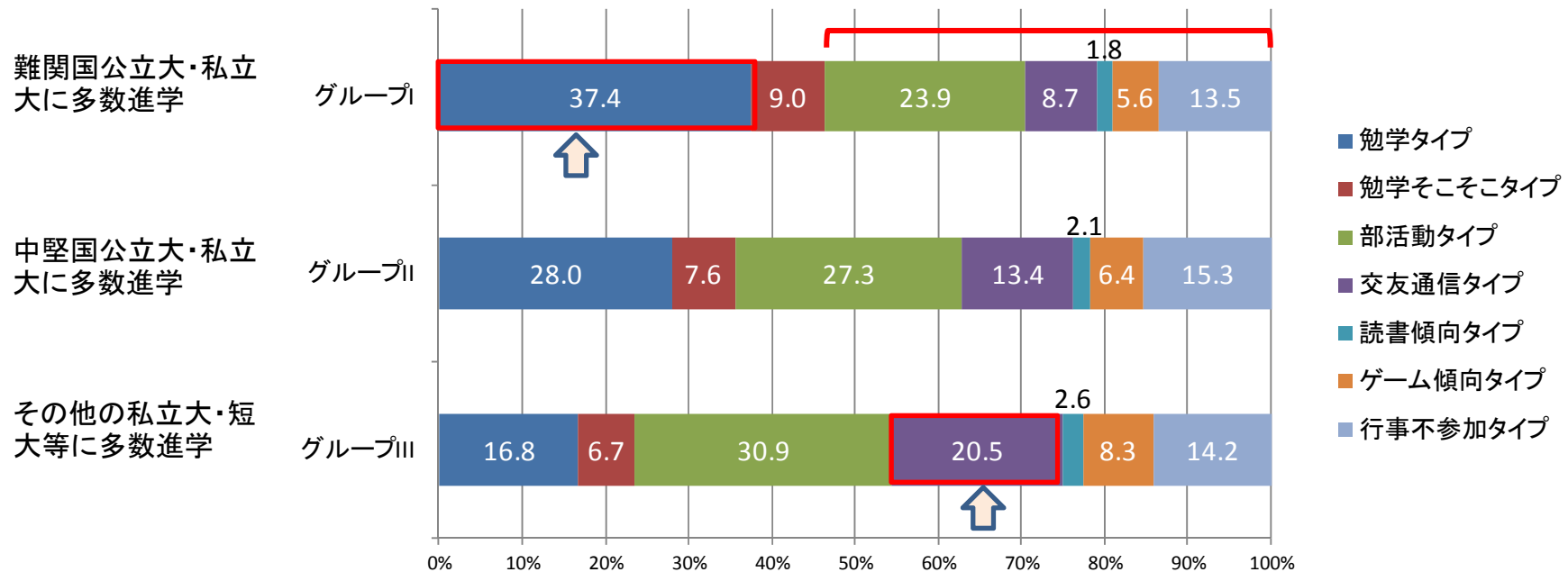


図 生徒タイプと技能・態度の伸びとの関連

・「他の人と議論することができる」「人前で発表することができる」は、対人関係が得意くらいでは身につかない。学習（アクティブラーニング）との深い関連性。  
 ・「異文化や世界に関心を持つ」も学習と関連。



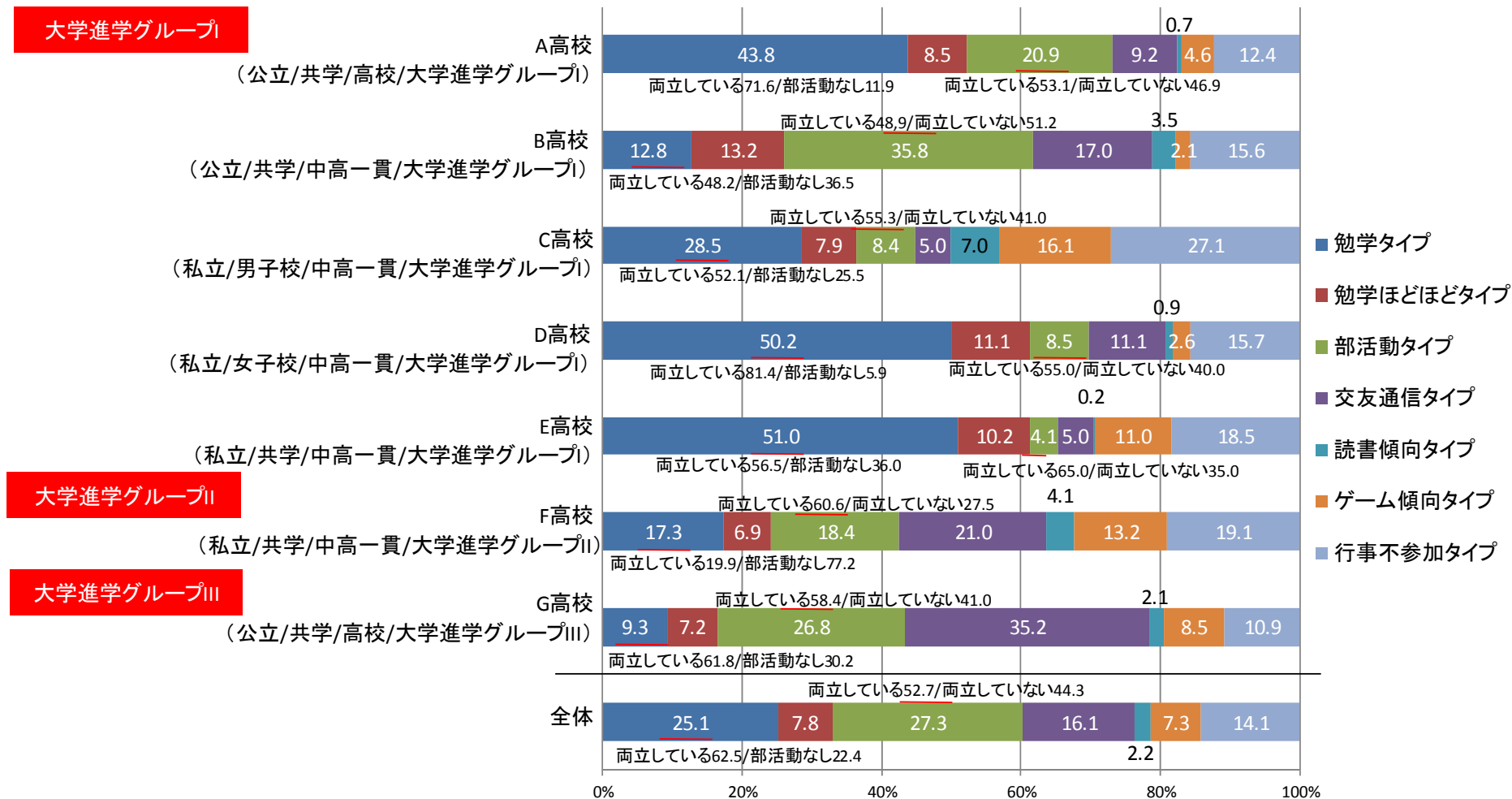
# 大学進学グループとの関連



「グループ分類は、河合塾の調査による」

- ・難関大学への進学実績が高いグループで「勉学タイプ」が多く、進学実績が比較的高くないグループの2倍以上の割合を有する。他方で、「交友通信タイプ」は、進学実績が比較的高くないグループで多く、進学実績が高いグループの2倍以上の割合を有する。「行事不参加タイプ」は、進学実績に関係なく、どのグループにも10～15%はいる。
- ・グループ1でも、部活動タイプ～行事不参加タイプが過半数以上いる。彼らが受験勉強を短期間で仕上げ難関大学へ進学する場合、彼らの大学生になってからの技能・態度やキャリア意識は大丈夫か。

# 生徒タイプから見た個別の高校の実態



\*表中のタイプの割合は、高校が特定されないように、若干修正している。  
 \*\*勉強タイプと部活動タイプには、勉強と部活との両立の割合を示している。

ご清聴有り難うございました

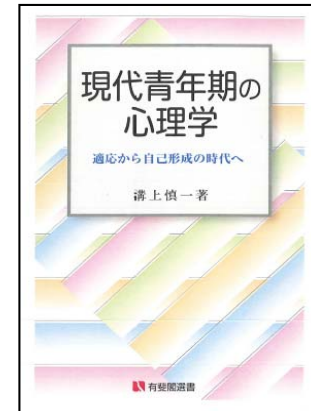
## Contents

- ① トランジションと変わる社会
- ② 変わる大学での学び
- ③ 10年トランジション調査の考察と今後の展開

興味があればお読みください

溝上慎一 (2010). 現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ— 有斐閣選書

青年期の現代への変貌を歴史的・社会的概説しつつ、学習やキャリア意識(2つのライフ)が、大学生にとっていかに現代的な青年期課題になっているかを説明したもの。



溝上慎一・松下佳代(編) (2014). 高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育— ナカニシヤ出版

この10~15年、世界的に喫緊の課題となっている学校から仕事へのトランジションを、国際的に定義し・国際的な近年の動向を概説したもの(溝上慎一)。ほか「大学から仕事へのトランジションにおける<新しい能力>」(松下佳代)、「<移行>支援としてのキャリア教育」(児美川孝一郎)、「アイデンティティ資本モデル—後期近代への機能的適応」(ジェームズ・コテ)、「後期近代における<学校から仕事への移行>とアイデンティティ—「媒介的コミュニティ」の課題」(乾彰夫・児島功和)ほか。



# 講師プロフィール

1970年1月生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学高等教育教授システム開発センター助手、2000年講師、2003年京都大学高等教育研究開発推進センター准教授。2014年より教授(現在に至る)。大学院教育学研究科兼任。京都大学博士(教育学)。



<http://smizok.net/>

日本青年心理学会常任理事、大学教育学会常任理事、『青年心理学研究』編集委員、『大学教育学会誌』編集委員、“*Journal of Adolescence*” Editorial Board委員、“*International Conference on the Dialogical Self*” Scientific Committee委員。公益財団法人電通育英会大学生調査アドバイザー、大阪府立大学高等教育開発センターIR顧問ほか、高校のSSH運営指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、青年心理学(現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化)と高等教育(大学生の学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事へのトランジションなど)。著書に『自己形成の心理学－他者の森を駆け抜けて自己になる』(2008世界思想社、単著)、『現代青年期の心理学－適応から自己形成の時代へー』(2010有斐閣選書、単著)、『大学生の学び・入門－大学での勉強は役に立つ！－』(2006有斐閣アルマ、単著)、『高校・大学から仕事へのトランジション－変容する能力・アイデンティティと教育－』(2014ナカニシヤ出版、編著)、『活躍する組織人の探究－大学から企業へのトランジション－』(2014東京大学出版会、編著)など多数。